

# 虚偽情報をめぐる哲学の現状：陰謀論を中心に

植原 亮 (Ryo Uehara)

関西大学総合情報学部

本提題では、陰謀論を中心とする虚偽情報をめぐる哲学的な議論の現状を概観し、主要な論点を整理する。提題を通じて、陰謀論が哲学的にも真剣な検討に値する重要な主題であることを示すのが、ここでの目標である。

陰謀論が怪談や都市伝説と同様に娯楽として消費されている分にはさしたる害はないが、ヒトラーが熱心なユダヤ陰謀論者であったことや、米国のトランプ前大統領をめぐる政治的状況（いわゆるQアノン）からもわかるように、悪質な陰謀論がときに社会や歴史を大きく動かす一因となりうるのも確かである。最近ではSNSも陰謀論の浸透を後押ししているし、日本版Qアノンつまり「Jアノン」の活動が確認されていることから、日本国内においても、社会に深刻な影響を及ぼす陰謀論の浸透など海外での出来事にすぎない、と対岸の火事を決め込んで看過するのは難しくなっている。

こうした状況を反映して、心理学や社会科学、そして哲学などさまざまな分野で、陰謀論の研究が行われている。たとえば、サンスティーンは、陰謀論を主題的に取り上げた興味深い論考を公表しており、それをめぐる論争が継続している。サンスティーンは、社会に害悪をもたらしかねないタイプの陰謀論に政府がどう対処すればよいかについて考察し、「認知的潜入」という方法を提案する。しかし、これに対しては、他の哲学者から厳しい批判が突きつけられており、むしろ一部の人々をいっそう強く陰謀論にコミットするように動機づけてしまう可能性が指摘されている。そこでおそらく求められるのは、少し発想を変えて、社会には陰謀論が常に存在し、根絶は簡単ではないとの前提に立ったうえで、陰謀論の拡大の予測と未感染者への予防措置に重点を置いた、いわば「情報の疫学」「思考の公衆衛生学」を目指すことである。

こうした陰謀論の浸透への対処法をめぐる問題の検討が求められる一方で、そもそも人はなぜ陰謀論などというものに惹かれるのだろうか、という問いもきわめて重要である。陰謀論をめぐる哲学的考察の出発点に位置するポパーによれば、陰謀論は有神論的な世界観が姿を変えたものだという。カサムは最近の著作で、陰謀論を前近代性によって特徴づけているが、そこにも有神論との同型性を見てとるポパーの主張との類似性が見受けられる。例えばケネディ暗殺という途方もない出来事は、それ相応の理由があって生じたと考えねばならず、背後に国家規模の邪悪な陰謀があってようやく釣り合うような、それだけ深く大きな意味のある事件だったはずだというわけである。カサムが他に挙げている陰謀論の特徴と考え合わせると、陰謀論が我々の自然な認識にマッチしやすいこと、いわば「人に優しい」ことが示唆される。さらに「説明の深度の錯覚」として知られる現象もここには関与していると考えられるため、陰謀論を検討するうえでも人間の認識の集団性や共同性といった視点が欠かせないことが明らかになる。

以上に関連する論点として、同じく「人に優しい」といわれる疑似科学と陰謀論の異同

の検討、陰謀論者に対する非難可能性および認識的不正をめぐる問題、陰謀論を信じることで認識的な悪徳の関係に迫る悪徳認識論の試みなどが挙げられる。本提題はこれらの論点に簡単に触れて締めくくりとする。

#### 主要参考文献

Coady, D. Cass Sunstein and Adrian Vermeule on conspiracy theories. *Augumenta*, 2017

Cassam, Q. *Conspiracy Theories*. Polity Press, 2019

Levy, N. Radically socialized knowledge and conspiracy theories. *Episteme*. 4, 2007

Sunstein, C. R. *Conspiracy Theories and Other Dangerous Ideas*. Simon and Schuster, 2014

植原亮「陰謀論（１）社会への浸透にどう対処するか」『文部科学教育通信』、507号、pp.10-11、2021年

植原亮「陰謀論（２）「人に優しい」陰謀論」『文部科学教育通信』、508号、pp.10-11、2021年

笹原和俊『フェイクニュースを科学する——拡散するデマ、陰謀論、プロパガンダのしくみ』、化学同人、2018年

カール・R・ポパー『推測と反駁——科学的知識の発展』、法政大学出版社、1980年